

震災に見舞われた兵庫県、特に神戸市は人の体に例えれば、言葉は良いとは思われませんが「瀕死」の状態にあったと思います。それも身体中に色々と傷を受けている。この状態の人の命を救うには何をすべきでしょう。私は最も大切なことは、「心臓を動かし続け、動脈に血液を流し続けること」だと思いましたが。傷の手当、患者への精神面でのケア等はその後にくるものでしょう。自衛隊の任務は、その組織の特性、力から見て、この骨幹となる作業を徹底的に続けることであり、その為には初期における人命救助に引き続き、ライフライン、特に「真水を供給し続けること」と、災害現場における最大の組織力を持つ陸上自衛隊が最大限の力を発揮できるように、陸上自衛隊員の戦力(災害活動を維持し、彼らに復旧作業の骨幹となる活動を続けてもらうこと)が、「神戸の心臓を動かし続け、動脈に血液を流し続けることだ」と考えたのです。暖かい思いやりと細かいところまで気を配った

ケアは大切ですが、これはボランティアの方々によって頂きましょう。この気持ちに逆になったら神戸市は死に至ると思つた訳です。

「冷たい」と言われようと、「被災者の身になっていない」と言われようと、とにかく、給水支援と陸上自衛隊隊員の支援に徹しようと思つた次第です。陸上自衛隊員は本当に気の毒だと思つています。震災直後から伊丹第三十六普通科連隊も、姫路の第三特科連隊も、八尾の航空隊も動いている。定められた隊区があり、定められた部署に従つて動いている。陸上自衛隊の初動は早かつたと私は確信しております。それなのに「自衛隊は何をしているのか」と震災初期における非難は徹底的に陸上自衛隊に向けられました。物理的にも移動が困難な交通渋滞の中を必死の思いで駆けつけて来たのでしよう。そういう状況にあつて、陸上自衛隊員は被災者の前で食事をとることも遠慮している。トイレも勿論ない。野営用のテントの多くは被災者に借してしまつて寝る

ところはない。

道端の車両の陰で寒さをしのぎ、仮眠をとっている。このような陸自の隊員を私は何人も見かけました。「これは戦闘(災害派遣活動)にならん」と思いました。復旧は長期化しそうです。三自衛隊の災害派遣も長期化しそうです。「陸上自衛隊員を何とかしてやらねばならぬ。彼等が十分な活動ができなければ、その結果は最終的に最も被災された方々に及んでしまう。」こう考えたわけです。

被災者であり、家が崩壊し、家族は避難所にいるような隊員が多い阪神基地隊で指揮を執り続ける事への思い(呉からの隊員は被災者ではないのですから)、ヘリコプター部隊はパイロットの体力の限界でヘリコプターを飛ばし続け、整備隊は不眠不休で整備を続けているであろう事への思い、艦船乗員の士気の維持等々、部下隊員のことも気懸かりでした。復旧が長期化することへの市民の方々のいらだち、被災された方々の立場に立てば無理ありません。

なかなか進まない連携、なかなか減らない給水量「逆に言えば、上水道復旧工事がなかなか進まないこと(水道局は最善を尽くしておられましたが)」等々、地方自治体の活動の実態もよくわからないだけに苦しい思いをしたこともありました。

四十数日にわたり阪神基地隊において指揮を執っている間、ひとつの語録が私の支えになりました。字の巧い准尉に大きな文字で書いてもらつて作戦室の壁に貼つておいたものです。

男の修業

苦しいこともあるだろう
言い度いこともあるだろう
不満なこともあるだろう
腹のたつこともあるだろう
泣き度いこともあるだろう
これらにじっと耐えて行くのが男の修業である

山本五十六

(「湘南桜美会だより」第七号 平成十二年二月一日号 掲載)「水交」3月号15頁より